

# 日本行動分析学会ニューズレター J - A B A ニューズ

2003年 冬号 No.33 (12月30日発行)

発行 日本行動分析学会 理事長 中野良顯

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学文学部心理学科学習心理学研究室内

FAX:03-3238-3658(日本行動分析学会事務局と明記) URL:http://www.behavior.nime.ac.jp/~behavior/

最近の学界の動向について.....	中野良顯
学会賞を受賞して.....	望月 要・佐藤方哉
2004年学会賞(実践賞)について.....	清水直治
編集委員会より.....	真邊一近
出版企画委員会より.....	藤田継道
公開シンポジウム企画委員会より.....	望月 昭
2003年度「日本在住学生委員のABA参加に対する助成事業」 選考結果について.....	杉山尚子
学会情報 / 常任理事会ヘッドライン.....	中野良顯
学会情報 / 会員情報.....	事務局
編集後記.....	藤 健一

## 最近の学界の動向について

理事長 中野 良顯

### グッド・ニュース

明けましておめでとうございます！グッド・ニュースをお知らせいたします。日本行動分析学会の会員は、2003年12月末に640人となりました。前年同期には580人ほどでしたので、この1年で60人以上の新しい会員をお迎えしたことになります。

学会の会員がなぜこのように増え続けているのでしょうか？その理由を考えてみたいと思います。第一の理由は、いうまでもなく行動分析学そのものが備えている学問としての魅力です。行動の原理はチャレンジングであり、私たちの思考を絶えず刺激してくれます。第二の理由は、会員のみなさんが日常的に積み重ねておられる研究と実践の質にあると思われます。それがモ

デルとなって、学問を志す若い人たちを呼び寄せることができているのではないのでしょうか。

そして第三の理由は、常任理事や理事の方がたの学会に対する情熱と絶大な貢献であると思われます。たとえば常任理事会は、年に6、7回召集されます。学会としてお支払いする交通費は遠方の方々に限られ、しかもわずか2回分に過ぎません。残りはずべて自己負担でお願いしています。また常任理事会は日曜日に開かれます。休日の午前10時半から3時過ぎまで、ときには夕方にすら及びます。にもかかわらず大切な休日に、名古屋や京都や神戸や兵庫や上越からお集まりくださり、時間を惜しまず議論を尽くしてくださっています。

私たちの学会の目的は「行動分析学の研究の

促進と、会員相互の連帯共同によって、行動分析学の進歩を図る」ことです。そのための活動は、会員数が増えることによって、いっそう盛んにしていくことができます。640 人の会員のみなさんとともに、今年も力を合わせて有意義な学会活動を創り出して行きたいと願っています。どうぞよろしく願いいたします。

#### 日本心理学会諸学会連合の動き

私たちの学会は、日本心理学諸学会連合（日心連）という団体に加盟しています。その日心連がいま、認定心理士の資格認定をめぐる、大きく動きつつあります。このことは今後予想される行動分析士(仮称)の資格についての議論とも密接に関係してくるよう思われますので、この機会に会員のみなさんに広くお知らせしたいと思います。

日心連は心理学関係の学術登録団体である 41 の学会から構成されています。理事会は年 2 回、6 月と 12 月に開かれています。直近の 2003 年 12 月の理事会は第 10 回でした。遡って考えてみますと、日心連は結成されて以来 5 年を閲しているものと思われます。

まず日心連に加盟している学会の顔ぶれを見ておきましょう。最大の学会は日本心理臨床学会（14,000 人）です。続いて日本教育心理学会（7,141 人）や、日本心理学会（6,683 人）や、日本カウンセリング学会（5,200 人）などがあります。それらに比べれば私たちの学会は小規模ですが、しかし私たちよりさらに小さな学会も加盟しています。たとえば日本理論心理学会（125 人）、日本応用教育心理学会（201 人）、日本行動科学学会（250 人）、日本バイオフィードバック学会（298 人）、日本遊戯療法学会（370 人）、日本青年心理学会（348 人）、日本臨床心理学会（380 人）、日本感情心理学会（359 人）、日本動物心理学会（395 人）、日本交通心理学会（443 人）、日本催眠医学心理学会（466 人）、日本臨床作学会（480 人）、日本リハビリテーション心理学会（560 人）、日本生理心理学会（566

人）、日本パーソナリティ心理学会（610 人）などです。

いま日心連は、常任理事会の主導によって、組織としての整備強化が図られようとしています。

常任理事会は、辻敬一郎理事長、市川伸一副理事長、森正義彦副理事長、平木典子常任理事、織田昌美常任理事、岩崎庸男常任理事、高木修常任理事、岡昌之常任理事、柏木恵子常任理事の諸氏によって構成されています。

整備強化を図ろうとする理由は、認定心理士の資格が「日本心理学会の資格」から、「日本心理学諸学会連合の資格」へと 2 年以内に移譲されることになり、日心連を社団法人日本心理学会に匹敵する強固な組織にしなければならない事態が生じたからです。

日心連による初の資格認定までのタイムスケジュールは次のように設定されました。

2003 年 12 月 心理学検定局準備委員会を設置（第 10 回日心連理事会で可決承認）

2004 年 03 月 検定局長、事務局長、各委員の選出、初会合。

2004 年 06 月 検定局の正式発足（理事会で承認） 広報。

2004 年 09 月 第 1 回検定に向けてのアナウンス。

2005 年 03 月 第 1 回検定受験者募集開始（05 月まで）

2005 年 08 月 第 1 回検定実施(初旬)。

2005 年 10 月 第 1 回合格者通知

したがって順調にことが運ばば、2005 年には日本心理学諸学会連合が日本心理学会に代わって、第 1 回の認定心理士の資格認定を行うこととなります。この資格委譲について、日本心理学会からは、およそ次の 3 段階を踏むようにとの要請が、日心連側に出されています。

第 1 段階 日本心理学会(日心)の資格認定事業に、日本心理学諸学会連合(日心連)が協賛の形で加わる。日心認定委員会に日心連から少数の委員が加わる。認定手数料の一部が日心連の

収入になれば、納税義務が生じる可能性がある。

第2段階 日心と日心連の共同事業とする。時期としては、およそ2年後とする。

第3段階 日心連に資格認定を委譲する。その場合、関係業務は日心連が日心に委託する。この段階的措置が円滑に進めば、社団法人日本心理学会は社員総会に議案を提出して定款改正を行う。

日心連第10回理事会(2003年12月)では、この日心の要請を受け入れるかどうかが審議されました。席上このままでは、事業主体は日心連に移っても、業務主体は永遠に日心にとどまることになるとの懸念が表明されました。辻理事長が議論の趨勢を汲んで、第3段階の「その場合」という文言を「当分の間」に改め、業務主体が永遠に日心にとどまるのではなく、その先の段階がありうることを明確にしたうえで、ぜひ議決してほしいと提案されました。投票の結果36対7でこの3段階委譲手続き案が可決されました。

日心連の組織を整備強化するため、常任理事会によって第10回理事会に提案された方針は、次の4つでした。

1. 組織の整備 各種委員会(総務、財務、資格、教育、学術、国際、広報、編集、事業、将来構想など)を緊急度に応じて発足させる。

2. 会則等の制定 将来の法人化を視野に収め、定款制定の基礎になるよう現行の会則および施行細則を抜本的に見直し、2004年3月21日の特別理事会において改定するとともに、新たに諸委員会規定の制定を行う。

3. 財政基盤の強化 現行の分担金(会費、日本行動分析学会は年3万円)の基準改訂、新たな事業収入の確保、個人会員制度の導入について検討する。

4. 新事業の展開 諸学会の連携を強化し、学術集会の共催や日心連企画による研修の実施などを推進する。

第10回理事会ではこの4つの方針について審議され、結論としてこの方針で整備強化を進

めることが承認されました。

なお日心連が2005年度から行う心理学検定については、次のような試案(第2案)が出されています。

実施方法と回数に関しては、当分全国10ヵ所程度で年1回行うこととされています。

出題形式と合否については、2級(多肢選択試験150分、70点以上)と、1級(多肢選択試験2級と共通問題80点以上、および論述試験60分)に分けられ、1級不合格者であっても、2級の合格ラインを満たした者には2級を与えるとされています。

出題領域と配点では、必修5領域として、原理・方法・歴史、知覚・認知・学習、発達・教育、社会・感情・性格、障害・臨床、を指定し、各領域で18問ずつ出題して、1問1点として90点満点とするとされています。

選択領域として、神経・生理、数理・計量、産業・組織、健康・福祉、犯罪・非行、の5領域を指定し、その中から2領域を選択して受験し、選択領域ごとに5問ずつ出題して、1問1点として10点満点とするとされています。

受験料は2級7000円、1級10000円程度と考えられています。

この心理学検定は、各学会の認定する職能資格の基礎資格として位置づけられています。もし日本行動分析学会が行動分析士という職能資格を認定するようなことになったとすれば、おそらく学会としては、たとえば受験生に基礎資格として日心連の心理学検定を受けてくるよう要求して、どの領域では 点以上とることなどを指定することなどが考えられます。

日本行動分析学会では、藤田継道常任理事を中心に行動分析士資格検討委員会を組織していただき、今後の大まかな方針を検討していただくことになっております。今後会員のみなさんのご意見やご要望をおうかがいすることになるかと思われます。日心連の動きなども参考にし、資格問題についてのご自分のお考えを整理

しておいていただければと思います。

#### 年次大会や国際学会のことなど

2004 年には、行動分析に関係するさまざまな大会が予定されています。まず日本行動分析学会第 22 回年次大会（佐藤方哉実行委員長）は、9 月 4 日(土)、5 日(日)両日、帝京大学で開催されます。つぎに国際行動分析学会は、5 月 28 日から 6 月 2 日まで、ボストンで開催されます。

また今年アジアでは、二つの国際会議が予定されています。第一は世界行動療法・認知治療法会議（WCBCT2004）です。7 月 20 日から 24 日まで、神戸で開催されます。第二は第 28 回国際心理学会議（ICP2004）です。8 月 8 日から 13 日まで、中国の北京で開催されます。

それらに先立って、2003 年 11 月 8 日に、韓国行動分析学会（Korean Association for Behavior Analysis）が結成され、その創立を記念してテグ大学特殊教育リハビリテーション研究センターとロータス・フラワー・チルドレン・センターと共催で、「2003 年自閉症スペクトラム障害国際シンポジウム」が開催されました。アメリカの北アイオワ大学のマーチン・アグラン教授、オーストラリアのクイーンズランド大学のアラン・ラルフ助教授、テグ大学のサン・ボク・リー教授らが参加しました。日本行動分析学会を代表して私も蔚山の会場で研究発表をしました。あらかじめ送っていただいたパワーポイントの配布資料が配布されていたので、それを参照しながら次のとおり口頭発表いたしました。

#### **How to Establish Early Intensive Behavioral Intervention for Children with Autism Spectrum Disorders (Sophia Autism Project: Since 1994)**

Yoshiaki Nakano  
(Professor, Psychology, Sophia University,  
Japan)

Let me first of all thank you for inviting the 2003 International symposium on Autism Spectrum Disorders commemorating the opening of Korean

Association for Behavior Analysis. It is a pleasure to visit Korea as one of Asian partners of behavior analysts.

Autism is a developmental disability affecting verbal and nonverbal communication and social interaction, generally evident before age 3. Other characteristics associated with autism are engagement in repetitive activities and stereotyped movement, resistance to environmental change or change in daily routines, and unusual responses to sensory experiences (IDEA, 1997).

The essential features of autism typically appear before 30 months of age and consist of disturbances in (1) developmental rates and sequences, (2) responses to sensory stimuli, (3) speech, language, and cognitive capacities, and (4) capacities to relate to people, events, and objects (Autism Society of America, 2000).

The treatments of choice for children with autism recommended by the U. S. Surgeon General (1999), New York State Department of Health (1999), and other empirically validated reports are the intensive, sustained special education programs and behavior therapy early in life.

A well-designed study of a psychosocial intervention based on applied behavior analysis was carried out by Lovaas and his group at UCLA.

The teaching methods used in the Lovaas early intervention project were derived from applied behavior analysis (ABA). ABA is a systematic approach for designing, conducting, and evaluating instruction based upon scientifically verified principles describing how the environment affects learning (Heward, 2003).

Lovaas (1996) empirically delineated the criteria for a comprehensive behavioral treatment for children with autism. They are:

1. Emphasis on Behavior Analysis
2. Active Family Participation
3. One-to-One Instruction starting as early as 2 to 3 years of age
4. Integration into normal educational settings
5. Comprehensiveness of training curriculum
6. Intensity of treatment, i.e. 40 hours a week for at least 2 years.
7. Program must be selected based on individual differences.

We know Applied Behavior Analysis is the evidence-based treatment of choice for children with autism. But knowing the best treatment is one thing, and its systematic implementation in various places is another thing.

My students and I were trained by Lovaas at UCLA, in 1978/79, 2000, and 2001/02. We spent several years at UCLA and learned the basics of ABA treatment, but feel still that it is difficult to replicate the outcome of Lovaas (Lovaas, 1987) in Japan.

Challenges we face are:

1. How to expand treatment time in

natural-settings to help young children with autism maximize their developmental potentials.

2. How to recruit motivated students and train them with a cost effective training program into devoted and effective therapists and/or teachers.
3. How to organize and run an effective team for providing long-term quality instruction.
4. How to help parents maintain quality home based intervention with appropriate consultation.
5. How to establish and provide an effective social skills training to children who completed one-on-one intensive behavioral treatment.
6. How to help children with autism spectrum disorders with limited language to develop and maximize their communicative functioning (Sasaki, Nakano, Kato, & Yamamoto, [2003]).

In order to meet these challenges, we inaugurated pilot studies of an intensive treatment with two young children with autism. We also worked on the development of training programs for parents and novice therapists, provision of social skills training for preschoolers and elementary school students with autism, and a PECS-type programming for children with limited language.

Sophia Young Autism Project was instituted in 1994 at Sophia University, Tokyo, based on the UCLA-YAP model.

The clinic director was trained at UCLA under Dr. Lovaas in 1978-1979 & 2001-2002. Two graduate students completed the UCLA 9-month internship training in 2000 & 2002. We are authorized as a site for the international UCLA-YAP replication project, and implementing an early intensive behavioral intervention for children with autism adhering to "Criteria for Appropriate Treatment" (Lovaas, 1996).

Now I will present a demonstration videotape for about 15 minutes. This video describes behavior changes of a young boy with PDD who had our three year intensive treatment.

In the beginning he was 2 years old and was mute, but now he can verbally communicate fluently with parents, therapists, and his peers at his kindergarten class.

You can see his outcome data of the intensive one-on-one behavioral treatment, that is 20-25 hours a week for two years in your handout. Please see the description of the pilot study 2.

The video also contains some scenes of our social skills training with four children with autism being done at the playroom of Sophia University campus clinics.

In pilot study 2, for the first year, 6 graduate students trained in ABA regularly visited the boy in his home and conducted the intensive instruction for

two to three hours per therapist per session.

The second year, 2 more undergraduate students who completed the novice student training program participated in the treatment (Nakano & Tsumuraya, 2002).

The curriculum consisted of visual-spatial skills, playing with toys, language, self-help skills, and supported inclusion in a gym class.

Long-term outcomes of the intensive treatment are:

1. Significant gains on IQ & VQ ( $\geq 10$  points).  
(1) IQ gains: 39 points  
(2) VQ gains: 15 points
2. Small gains on SQ ( $\leq 10$  points).  
(1) SQ gains: 6 points

Short-term outcomes are:

1. Significant improvement shortly after the onset of the treatment were compliance with receptive commands, nonverbal imitation, and verbal imitation.
2. No improvement was found on expressive labels for the first 6 months.

Now I'd like to explain briefly about our social skills training. We are providing social skills training to children who completed the one-on-one intensive behavioral treatment.

The video illustrates four children with autism doing group activities in a structured environment. A girl age nine, a boy age seven, and two boys age six come to our playroom three Saturdays a month to have a two-hour group social skills training.

We use a direct instruction model to design and implement the lesson plan. Children learn classroom survival skills (e.g., sitting quietly, getting important information from teachers and peers), basic social interaction skills (e.g., greeting, saying thank you), conversation skills (e.g. commenting, asking questions), friendship skills (e.g., expressing feeling, joining in group activities), and coping skills (e.g., saying no to unreasonable requests, self-control of their own emotions).

Activities consist of free play (10 min.), circle time (15 min.), handcrafts, quizzes, and other group activities (30 min.), games (25 min.), snack time (15 min.), closing (15min.), and free play.

One team leader and student-confederates participate and teach children to be social and collaborate with each other hoping for generalization from the small group setting into their classrooms, families, and communities.

In addition to the intensive treatment and the social skills training, we provide parent training (Nakano & Miyazaki, 2001) and paraprofessional training (Nakano & Tsumuraya, 2002), a monthly video consultation, and workshops to families on our waiting list.

We learned several important lessons from those pilot studies and related clinical activities:

First, it is imperative to maintain young children's motivation during long treatment hours.

You had better design a session schedule taking account of your child's physical conditions and daily life pattern. If your child is in good shape, you can teach a lot. If your child is in bad shape you have to restrain yourself from teaching too much. Don't push him/her to respond. If you coerce him/her to cooperate, you cannot teach him/her for two to three years.

Let him/her get a lot of fun out of the intensive instruction, making use of interesting tasks and fascinating toys, intersperse serious instruction with toy play, arts & crafts, and amusement, and of course, giving him/her tremendous social reinforcement.

Second, it is also important for therapists to trust and work in collaboration with each other to produce long-term good outcomes. The team leader must schedule and manage your therapists thoughtfully. Require each therapist to participate in the treatment at least 7 hours per week.

Third, invite and encourage parents to participate in the intensive treatment. Provide them with opportunities to learn how to use discrete trials, PECS, and other augmentative and alternative communication systems by specially arranged systematic parent training programs. Facilitate the commitment and participation of both parents. Showing them good data on the child's improvement will enhance parental motivation.

Fourth, ensure quality control of your treatment by developing and using a follow-up evaluation system for therapists, having weekly team meeting and monthly case supervision, trouble-shooting problems during the meetings, and elaborating individualized instruction programs. Recruit and train people who are reliable, open-minded to criticism from others, punctual, and considerate.

Fifth, expand and maintain the treatment intensity by training parents as co-therapists, regularly providing and recruiting novice student-therapists with good training and coaching programs, doing long-term research and practice, and evaluating its effectiveness, and solving financial issues.

In conclusion, we employ a team approach. A team, or a system is an orderly combination of two or more individuals whose interaction is intended to produce a desired outcome (Curtis & Stollar, 2002). The goal of our team is to help children with autism spectrum disorders to catch up with normal peers. Members of the team consist of children, parents, novice therapists, senior therapists, and a clinic director. It is necessary for members to have close collaboration, commitment to the mission, mutual respect, and trust in each other. They must have the ability to listen, ask open-ended questions, paraphrase, and synthesize information. All of us unanimously receive the utmost reinforcement from the improvement our children demonstrate.

Thank you.

## References

- Autism Society of America (2000). *Advocates*, 33(1), 3.
- Curtis, M.J., & Stollar, S. A. (2002). Best practice in system-level change. In Alex Thomas & Jess Grines (Eds.), *Best practice in school psychology* (vol. ). Bethesda, MD: NASP.
- Heward, W. (2003). *Exceptional children* (7th ed.). Upper Saddle River, NJ: Merrill. Individuals with Disabilities Education Act of 1997.
- Lovaas, O. I. (1996). *Criteria for Appropriate Treatment*. Paper presented at the Early Intervention Conference 1996, Los Angeles, CA.
- Lovaas, O. I. (1987). Behavioral treatment and normal educational and Intellectual functioning in young autistic children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 55, 3-9.
- Nakano, Y., & Miyazaki, M. (2001). *Training parents to be behavior analysts: Development and application of training program for families with autistic children*. Paper presented at the 27th annual convention of the Association for Behavior Analysis, New Orleans, May, 2001.
- Nakano, Y., & Tsumuraya, Y. (2002). *Training paraprofessionals for early & intensive behavioral intervention with young children with autism*. Paper presented at the 28th Annual Convention of the Association for Behavior Analysis, Toronto, May, 2002
- New York State Department of Health, Early Intervention Program. (1999). *Clinical practice guideline: Report of the recommendations. Autism/PDD, assessment and intervention in young children (age0-3yrs)* (No. 4216). Albany, NY: Author.
- Yamamoto, T., & Nakano, Y. (2002). *Early intensive behavioral intervention with children with autism: Pilot study in Japan*. Paper presented at the Ohio State University's 3rd Focus on Behavior Analysis in Education Conference 2002.
- Sasaki, M., Nakano, Y., Kato, A., & Yamamoto, T. (2003). *Facilitating development of language in a child with autism using a reading and writing program*. Paper presented at the 29th Annual Convention of the Association for Behavior Analysis. San Francisco, May, 2003.
- U.S. Department of Health and Human Services. (1999). *Mental health: A report of the surgeon general*. Rockville, MD: Author.

## 学会賞を受賞して

論文賞受賞に照れながらの二人の会話

望月 要(メディア教育開発センター/総合研究大学院大学)・佐藤 方哉(帝京大学)

M「ニューズレターの「学会賞を受賞して」は何を書きましょうか」

S「第一回の論文賞を受賞したことは大変に名誉で、有難く思っております」なんていうありきたりのことは書きたくありませんねー」

M「同感です。確かに分にすぎる名誉ですが、それを大げさに書いてもね。あの論文で書けなかったことを書くのはどうでしょう」

S「賛成、賛成。ところでそれは何だろう」

M「最近、行動遺伝学や進化心理学から”パーソナリティ”を論じる動きがあるようですね。これは、色々な意味で興味深い現象だと思います」

S「実は、このところ進化心理学の本をちょっと読み出したところなのですが、たしかに”パーソナリティ”の扱いは今までのパーソナリティ心理学者のものとは違って面白ところがあるようですね」

M「しかし、そうした研究が、どうも、遺伝的根拠を求める傾向が強いように思えるのが不思議です。行動遺伝学や進化心理学というのは---ちゃんと勉強した訳ではないですが---必ずしも全てを遺伝で説明することを目指している訳ではないと思うのですが・・・“パーソナリティ”の外的妥当性を検討するという大切な

ことだと思いますが、それを、最初から《遺伝》に求めてしまったら、「性格は遺伝する」という結論しか出て来なくなってしまうような気がします」

S「パーソナリティを不変なものと考えている点では、伝統的なパーソナリティ観から余り抜け出ていませんね」

M「パーソナリティを変化し続けるものとするのは、やはり行動分析学独自の視点なのでしょうか」

S「それが僕たちの《行動レポーター観》なわけだ。でも、あの論文では、それを指摘しただけで終わってしまったような気がしますね」

M「そんな大きな宿題は、私たちには荷が重過ぎる!」

S「ところで、枚数はどれくらい書けばよいのかな」

M「確か600字だったと思います」

S「それじゃあ、今まで話したことをまとめれば充分かな」

M「超過しちゃってるかもしれませんよ」

S「少しぐらいは勘弁してもらえないかな」

## 2004年 第2回学会賞(実践賞)候補者推薦のお願い

学会賞(実践賞)担当常任理事 清水 直治

日本行動分析学会学会賞(実践賞)の選考規程に則り、2004年度の日本行動分析学会学会賞(実践賞)候補者の推薦をお願いいたします。

この学会賞(実践賞)の選考対象となるのは、「現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用して顕著な実績をあげた個人また

は組織であって、日本行動分析学会の会員であることを問わない。」と規定されています。候補者になれるのは会員・非会員を問いません。会員の皆さまからの推薦によって候補者を決定いたします。日本行動分析学会会員であれば、どなたでも候補者を推薦する権利があります。

推薦の締切りは、2004年2月14日(当日消印有効)です。すばらしい実践を行っている個人や組織をこの機会にぜひご推薦ください。

なおご推薦いただく場合には、本号の最終ページにある推薦用紙をご利用のうえ、日本行動分析学会事務局までお送りください。なお学会賞(実践賞)の選考規程等については、学会HP

でごらんになれます。

---

#### 推薦要領

---

推薦締切り 2004年2月14日(消印有効)

推薦書様式 末尾の用紙をご利用下さい。

推薦書類の送り先

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町

上智大学心理学科学習心理学研究室内

日本行動分析学事務局

## 編集委員会より

行動分析学研究 編集委員長 真邊 一近

今年度は、第17巻の1号と2号が前編集委員会によりすでに発行されました。これは、昨年度発行予定の巻でしたので、年に2冊を発行するためには、第18巻の1号と2号を今年度中に発行することが新編集委員会に課された課題です。

新編集委員会に移行してから最初の号になる第18巻1号は、1月の発行を目指して現在すでに校正作業に入っています。2号は3月の発行を予定しています。来年度は、中島定彦編集委員をアクションエディターとして、倫理問題特集号「行動分析学と倫理」を第19巻1号で発行し、2号では投稿論文を主とした構成を予定しています。

現在のところ、投稿論文数は従来よりやや増加傾向にあります。このことにより、論文数の少なさによる刊行の遅れの問題が解決されるばかりではなく、論文の質の向上、行動分析学会からの情報発信の増加、すなわち行動分析学会

の活性化へとつながることを期待しています。

新編集委員会では、e-mail等を利用して査読の迅速化に勤めてまいりました。成果が現れつつあると考えていますが、諸種の事情で時間がかかってしまう場合があります。論文を投稿中は、論文がどのように処理されているか不安になることがあります。また、返事が遅れると、ついつい悪い方向に考えてしまうことがあります。このような事柄を考慮して、新編集委員会ではその都度、途中経過をお知らせするよう心がけています。もし、返事が遅い場合は、編集委員長宛にメールをいただければ出来るだけ早く対応するようにしていますので、躊躇することなくお問い合わせください。

皆様のご努力によって得られた貴重な情報を、行動分析学研究でいち早く発表できるよう、行動分析学研究編集委員会は努力してまいります。皆様のご投稿を心よりお待ちしております。

## 出版企画委員会より

### 行動分析学会編「行動分析学入門(仮題)」(新書版)の刊行に関する アンケート調査の最終報告

普及書刊行委員会 担当常任理事 藤田 継道

先般の行動分析学会にご出席された方々のうち200名の方々に本アンケート調査の協力を依頼いたしました。そのうち、109名の方々がご回答くださいました(回収率 54.5%)。1. 年齢、2. 性別、3. 本学会会員か否か、4. 職業をご回答いただきましたが、今回は回答者の人数が少ないので、年齢別、性別、会員・非会員別、職業別の結果は掲載していません。これに続いて、5. ~ 33の問には、本書刊行の基本理念・基本方針についておたずねし、「はい、いいえ」でお答えいただきました。この回答が表1にまとめられています。

予備調査で何人かの若い会員に思いつくままに取り上げるべきかどうかを会員に聞いてみたい項目51項目を上げてもらいました。回答者の方々にはこの51項目のそれぞれについて、表に示している5段階評定をしてもらいました。すべての回答者がこの51項目すべてに回答してくれているわけではありませんので、項目ご

とに回答者数が若干異なります。50%以上の回答者が「是非とも取り上げるべきである」と回答した項目は「セルフマネジメント・セルフコントロール」1項目だけでした。40%以上の方が「是非とも取り上げるべきである」と回答された項目は「不登校・引きこもり」「学級崩壊」「いじめ」「対人関係のトラブル解消の方法」、同率で「犯罪・非行の凶悪化・低年齢化」「教師への援助」でした。必要性の高い回答率を得たこれらの項目はそれぞれ単独で1冊の本になる内容のものばかりでしたので、基礎編と応用編に分けて2冊刊行するのも良いかもしれません。

これから、歴代理事長の先生方にご意見をお聞きし、どなたにどの内容・項目をご執筆いただけるか、最後の詰め作業に入りたいと思っています。どうぞ、会員のみなさん方の忌憚らないご意見をお寄せください(メールでお願いできると助かります。メールアドレスは [tpfujita@edu.hyogo-u.ac.jp](mailto:tpfujita@edu.hyogo-u.ac.jp) です)。

### 行動分析学入門書刊行のためのアンケート

平成15年8月4日実施

会員	69名	非会員	39名	無記入	1名	計	109名		
学生	35名	院生	24名	大学教官	18名	教諭	13名	その他	19名
男性	62名	女性	46名	無記入	1名	(数値は回答者の割合%)			

表1 普及書刊行の基本理念・基本方針

番号	項目	はい	いいえ	無回答
15	行動分析学が役立つ分野・領域について紹介する	95.4	3.7	0.9
8	行動分析学の考え方、人間観を分かり易く解説する部分が必要	92.7	6.4	0.9
7	心理学と行動分析学の存在意識、社会への貢献度について述べる	90.8	8.3	0.9
14	遺伝と環境、認知等について行動分析的な説明が平易になされること	83.5	14.7	1.9
12	行動分析学、応用行動分析学、行動療法等の各異同についての説明	78.0	21.1	0.9
10	臨床心理学のあるべき姿や進むべき方向性について述べる	75.2	22.9	1.8
5	読者は一般大衆・専門に分かれる前の心理学科の学生を対象とする	72.5	24.8	2.8
13	行動分析学への批判に対する伝統心理学、行動分析学の説明の対比	69.7	28.4	1.8
9	伝統的心理学や精神分析学の考え方や用語を行動分析学の立場から解説	63.3	33.9	2.8
17	人間の日常行動や習慣、伝統等を行動分析学の立場から説明する	63.3	33.9	2.9
16	教師を目指す人へ、医学を目指す人へというような章を設ける	61.5	33.9	4.6
6	読み易く、楽しい物語風の入門書にする	59.6	36.7	3.7
11	心理学の資格問題について行動分析学の立場からの見解を述べる	51.4	48.6	0.0
19	人類が遭遇している困難な問題の解決策を提示することを試みる	43.1	54.1	2.8
18	日本が生き残るための施策を提示することを試みる	24.8	72.5	2.8
26	若者達へのメッセージ 若い教師へのメッセージ	76.1	15.6	8.3
31	若い父親・母親へのメッセージ	67.9	22.0	10.1
22	高校生とその保護者へのメッセージ	58.7	34.9	6.4
24	大学生とその保護者へのメッセージ	56.9	33.0	10.1
25	大学院生とその保護者へのメッセージ	54.1	34.9	11.0
21	中学生とその保護者へのメッセージ	51.4	42.2	6.4
20	小学生とその保護者へのメッセージ	50.5	43.1	6.4
27	若い経営者へのメッセージ	47.7	41.3	11.0
23	専門学校生とその保護者へのメッセージ	41.3	47.7	11.0
8	若い政治家へのメッセージ	39.4	47.7	12.8
30	若いサラリーマンへのメッセージ	39.4	46.8	13.8
32	若いお年寄りへのメッセージ	37.6	47.7	14.7

注 5 是非とりあげるべき 4 できれば取り上げた方がよい 3 どちらでもよい  
2 できれば取り上げない方がよい 1 まったく取り上げる必要なし (数値は回答者の割合%)

表2 普及書の中で取り上げるべき項目とその割合

番号	項目	5	4	3	2	1	無回答	5 + 4
1	セルフマネジメント・セルフコントロール	54.1	21.1	2.8	0.0	2.8	19.3	69.0
2	ストレス対処	42.2	28.4	3.7	0.0	0.9	24.8	64.8
3	対人関係をうまくやるための対応策	44.0	25.7	6.4	0.0	1.8	22.0	64.0
4	不登校・ひきこもり	47.7	21.1	10.1	0.9	2.8	17.4	63.1
5	学級崩壊	47.7	18.3	12.8	0.0	0.9	20.2	60.6
6	犯罪・非行の凶悪化・低年齢化	44.0	22.0	11.0	1.8	0.9	20.2	60.6
7	いじめ	45.0	20.2	11.9	0.9	1.8	20.2	59.8
8	学級崩壊をきたす教師への支援	42.2	18.3	12.8	2.8	0.9	22.9	55.6
9	ノイローゼ・鬱・神経症等：心の病	32.1	27.5	11.0	2.8	3.7	22.9	54.7
10	心とは何か	33.9	22.0	18.3	0.9	3.7	21.1	51.3
11	子育て支援	31.2	23.9	12.8	0.0	6.4	25.7	50.5
12	飲酒・喫煙	24.8	30.3	9.2	2.8	5.5	27.5	50.5
13	妻子への家庭内暴力・虐待	31.2	22.0	12.8	3.7	3.7	26.6	48.8
14	気持ち・感情	21.1	31.2	14.7	4.6	4.6	23.9	48.0
15	カウンセリングマインド	18.3	31.2	16.5	3.7	5.5	24.8	45.5
16	ダイエット	20.2	23.9	15.6	4.6	8.3	27.5	40.4
17	フロイト等精神分析学の効用と限界	18.3	22.9	15.6	9.2	9.2	24.8	37.9
18	病気と健康	15.6	23.9	22.9	3.7	8.3	25.7	36.2
19	ペットのしつけ	13.8	23.9	24.8	2.8	7.3	27.5	34.5
20	ストーカー	14.7	16.5	24.8	7.3	10.1	26.6	28.6
21	チョムスキーのスキナー批判	11.9	19.3	22.9	6.4	13.8	25.7	28.6
22	日本が生き残るために独創性を育てる教育	14.7	14.7	26.6	9.2	11.9	22.9	26.9
23	認知過程・イメージ・夢	9.2	20.2	29.4	8.3	7.3	25.7	26.9
24	性格と占い	12.8	15.6	27.5	7.3	12.8	23.9	26.1
25	シングルマザーと子育て支援	10.1	18.3	28.4	5.5	11.9	25.7	26.1
26	生きがいと人生	9.2	19.3	21.1	9.2	14.7	26.6	26.1
27	教師のサラリーマン化	12.8	14.7	25.7	7.3	12.8	26.6	25.3
28	老後の生活	12.8	12.8	23.9	8.3	13.8	28.4	23.6
29	企業の論理・生産性・利潤	11.0	14.7	26.6	10.1	11.9	25.7	23.6
30	少子高齢化	11.0	12.8	22.0	11.9	13.8	28.4	21.9
31	ホスピス	10.1	13.8	31.2	6.4	11.9	26.6	21.9
32	幸福とは不幸とは	10.1	9.2	37.6	6.4	12.8	23.9	17.7
33	窓際族・リストラ・出向	7.3	11.9	30.3	7.3	15.6	27.5	17.7
34	結婚しない症候群	7.3	11.9	26.6	7.3	19.3	27.5	17.7
35	戦争	8.3	11.0	22.0	11.0	21.1	26.6	17.7
36	進学・就職・結婚のメカニズム	8.3	10.1	33.0	6.4	15.6	26.6	16.8

番号	項目	5	4	3	2	1	無回答	5 + 4
37	政治家のすべきこと・期待	6.4	11.9	23.9	11.0	19.3	27.5	16.8
38	死	4.6	12.8	33.0	10.1	11.9	27.5	16.0
39	競争(大学の法人化、学校と予備校)	3.7	13.8	27.5	10.1	17.4	27.5	16.0
40	性格と血液型	9.2	7.3	19.3	12.8	25.7	25.7	15.2
41	テロ	6.4	10.1	22.9	9.2	22.0	29.4	15.2
42	資格取得がはやる理由	2.8	11.0	24.8	13.8	20.2	27.5	12.6
43	物質と精神	4.6	8.3	35.8	6.4	20.2	24.8	11.8
44	宗教	4.6	8.3	25.7	14.7	22.0	24.8	11.8
45	エイズ	5.5	6.4	29.4	11.9	20.2	26.6	10.9
46	受験戦争	4.6	5.5	25.7	13.8	24.8	25.7	9.3
47	富と名声	2.8	5.5	34.9	11.0	21.1	24.8	7.6
48	もの作りから知的産業への移行	2.8	5.5	31.2	16.5	18.3	25.7	7.6
49	英会話学校がはやる理由	0.9	7.3	22.0	15.6	26.6	27.5	7.6
50	産業構造の変換(重厚長大 軽薄短小)	2.8	4.6	32.1	12.8	20.2	27.5	6.7
51	英雄・偉人の人生観解釈	0.9	2.8	27.5	11.9	30.3	26.6	3.4

## 公開シンポジウム企画委員会より

企画委員会 担当常任理事 望月 昭

2003年度も終盤に来てしまいましたが、自主企画シンポジウムの公募に関しては、例年の通り、会員の皆様からの応募を受け付けております。「今年はどうなっているのか?」というお問い合わせをいただきまして公示が大変おそくなりましたが、改めてお知らせする次第です。なお2004年度からのシンポジウムの開催につい

ては、応募や学会での選考手続きを改めて検討し直し明文化した上で会員の皆様にお伝えする予定です。

また学会期間中のシンポジウムを含めて、シンポジウムの形式や内容についてご意見やご希望を伺えれば幸いです。連絡は、mochi@lt.ritsumei.ac.jpまでお願いします。

2003年度「日本在住学生委員のABA参加に対する助成事業」選考結果について

第2回ABA派遣助成事業当選者決定!

担当常任理事 杉山 尚子

標記事業に対し、10月31日の締め切りまでに5名の申し込みがありましたが、12月20日開催の常任理事会における厳正なる抽選の結果、当選者2名が決定致しました。ここにご報告申し上げます。両名の研究のますますの発展を期

待すると共に、残念ながら選に漏れた方もぜひポストンで会いましょう!

加藤明子(上智大学) An Analysis of the Effects of Behavioral Consultation with Parents of Young Children with Autism on Their

Teaching Behavior and Their Children Test  
Scores (ポスター発表)

松井進(常磐大学)Behavioral Correspondence  
in Pigeons (ポスター発表)

## 学会情報

### 常任理事会ヘッドライン

理事長 中野良顯

#### 1. 第4回常任理事会

第4回常任理事会は、10月12日に上智大学で開催されました。今後、第5回常任理事会は、12月21日(日)に、第6回常任理事会は、2月8日(日)に開催される予定です。

#### 2. 会員数(2003年12月1日現在)

636名(一般505名、夫婦8名、学生119名、購読会員3名、賛助会員1名)。

#### 3. 機関誌の発行予定

現在、『行動分析学研究』第18巻第1号は、着々と編集作業が進められております。第18巻第2号では当初、倫理問題に関する特集が組まれる予定でしたが、編集の都合上次号以降に持ち越されることになりました。また、第18巻第2号より、会員の皆様に応募を求めて行動分析学にかかわる卒業論文、修士論文、博士論文の執筆者名と題目を掲載することになりました。

#### 4. 第2回学会賞の選考始まる

第2回学会賞の選考過程がスタートしました。学会賞には「論文賞」と「実践賞」があります。

まずは、会員の皆様から「実践賞」選考対象を推薦していただきます。選考対象となるのは、「現代社会における課題を解決するために行動分析学を応用として顕著な実績をあげた個人または組織」です。これは学会員であることを問いません。「実践賞」にふさわしい人や機関をぜひご推薦ください。また、第5回常任理事会において選考委員(論文賞担当17名、実践賞担当15名)を会員の皆様の中から抽選する予定です。抽選された会員の方々には、選考のご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

#### 5. 公開講座のお知らせ

今回はありません。

#### 6. 住所変更やお問い合わせはメールでお気軽に

学会事務局では、新入会員のお申し込みや会員の皆様の住所・連絡先変更などにつきまして、電子メールでもお受けいたしております。お気軽にメールをお送りください。アドレスは次のとおりです。yoshia-n@sophia.ac.jp

### 編集後記

今年も忙しい中、あと数日を残すのみとなりました。さて、ここにニュースレター33号をお届け致します。行動分析学会にかかわる学界の動向もその動きが急となってまいりました。行動分析学会の学会員も、それぞれの立場から検討を一層深めることが求められているようです。

また、学会員の学会に寄せる期待の一端をうかがい知る資料として、先の大会(岡山大学)で行なわれました出版企画に関するアンケート結果を、担当の藤田継道常任理事より戴くことができました。学会員の皆様、どうぞよいお年をお迎え下さい。(藤)



## J - A B A ニュース編集部より

書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、学会に対する提案や批判、求人情報、イベントや企画の案内など、さまざまな記事を募集しています。原稿はテキストファイル形式で電子メールかフロッピー（DOS）で、下記のニュースレター編集部宛にお送りください。なお、ニュースレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。掲載された記事は、日本行動分析学会ホームページでの公開を原則としていますので、ホームページ上での公開を望ま

ない事項（例えば、電子メールアドレスなど）のある場合には、あわせてニュースレター編集部までご連絡下さい。

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1  
立命館大学文学部心理学研究室気付  
日本行動分析学会ニュースレター編集部  
藤 健一  
( e-mail: fuji@lt.ritsumei.ac.jp  
電話 075-466-3193)

日本行動分析学会『実践賞』候補者推薦書

候補者 (組 織)	お名前 (代表者)	
	ご連絡先	TEL FAX メール
推薦者	お名前	
	ご連絡先	TEL FAX メール
推薦理由：		

【注】推薦には候補者（組織）の実践を示す書類など（論文、雑誌記事、著書など）の添付をお願いします（コピー可）。